



分娩後早期に卵巢機能の回復を促すには？

分娩間隔を短縮し、生産性を向上させるにはどうすればよいのでしょうか？以前、子牛の哺乳刺激により子宮の回復は促進されますが、初回発情が遅延するという報告を紹介いたしました(8月号参照)。

今回は分娩後早期に排卵促進剤(GnRH製剤)を投与することで、卵巢機能の回復を促進する方法について文献報告を交え紹介させていただきます。

これまで分娩後早期に排卵促進剤を投与することで、繁殖効率を改善する試みが数多く報告されています。

例えば、高橋らによる報告ではホルスタイン種経産牛において分娩後30日目でGnRH類似体(酢酸フェルチレリン100 μ g)を投与することで、無処置の対照区と比べ、空胎日数が約30日短縮し、受胎率も向上する結果が得られています。

<http://news7a1.atm.iwate-u.ac.jp/jsvc/thesis/200611/speech/015.pdf>

分娩直後には下垂体内の黄体形成ホルモン(LH)が少なく、分娩後約3週後までに下垂体のLH分泌能が回復することが知られています。

では、分娩後約何日目からGnRH製剤を投与することで初回排卵(卵巢機能の回復)を誘起できるのでしょうか？

北海道農業試験場が行った試験では、乳用牛で分娩後10日目では確かに30日目や、60日目の牛群と比べLH放出能は低かったのですが、分娩後10日目にGnRH類似体(酢酸フェルチレリン200 μ g)を投与したところ、全ての牛で2日以内に排卵が観察され、その後正常周期を再起したと報告されています。

<http://web08.affrc.go.jp/project/results/laboratory/harc/1997/cryo97-027.html>

ET研究所ニュース

2012年 12月号



超音波画像診断装置で描出した黄体画像

ET研究所本場のある上士幌もめっきり寒くなりました。寒冷ストレスも牛の受胎性にはマイナス要因となります。これからの季節、牛床管理や牛群内の肺炎などには十分注意されてください。

文責；全農ET研究所 中村

ホルスタイン種経産牛では分娩後約10日目にGnRH製剤を投与することで、卵巢機能の回復を促進し、空胎期間を短縮できる可能性が推察されます。

とくに初回発情が遅れる傾向にある授乳中の黒毛和種経産牛において、分娩後早期にGnRH製剤を投与することでより繁殖効率の改善が図れることが推察されます。